

講師 茂木 喜久雄

会計学

会計学答案作成法 1

解法の技

最近の出題傾向や過去問を探ってみると、おおよそ出題範囲は限られる。資産会計を主体に、それと関連する事項が中心である。

たとえば、損益会計からは、よく「実現主義会計」が出題されるが、これは現行の取得原価主義会計と表裏一体になる、という関連がある。また、資本会計からは、国庫補助金を中心に剰余金の処理・会計理論と商法、証取法などの解釈の相違の知識が必要になる。(過去問では、建設助成金、保険差益、贈与資産などオンパレードで出題されている。)

しかし、現行の企業会計が「新会計基準」の導入にさらされ、論争部分が出題されにくくなっているが、逆に新会計基準が必要なのは、その会計処理の原則および手続きになんらかの問題(利害関係者にとって財務情報に関する判断を誤らせてしまわせる可能性があるということ)があるということから、その部分をよめる力量がとられる可能性もあります。

出題傾向分析

現在の試験委員が会計の技術面も重視していることから(簿記の問題や計算問題も要注意)、理論だけの付け焼き刃では、まったく歯が立たない、逆に実務が多少経験がある人の方が双方間での取引事例が想定する習慣があるので有利ともいえる。(受験者の多くが経理経験者だとすると、本当に容易に見えるかもしれません。)

技術面の克服は、簿記の2級程度の取引が明らかにできる力が必要になりますが、特に簿記試験の問題では、取引を行う場合の商品売買を行っている側の仕訳を中心としています。

しかし鑑定士試験の会計学の簿記の問題部分は、商品売買を行っている企業のみならず、相手側はどのような仕訳をおこなっているか?例えば、委託販売を行っている時には受託側の仕訳、さらに、社債に関しては、発行側と購入側の双方間の取引事例が問われた年度もあります。

この考えは取得原価主義会計でも考えなければならないテーマです。取得した側は「測定対価主義」に従って、当社が支払った金額で測定(貸借対照表価額の決定)しますが、その資産を売った側は、当然に「売上」計上し、期末の決算整理仕訳を通じて売上原価を算定しているはずです。

いままで当たり前前に読んでいたテキストを引っくり返し、その理論が本当に実務で使えるのか?または、本当にその理論が判っていて帳簿上ではどのように処理されている



のか？再度、確認してほしい。

実力者の方へ

実力者の方々はもう一度、原点に戻って企業会計原則の文言を1つ1つ読み直してみてください。皆さんは、どのくらい深く、広く、それを解釈しているのかを確認してみて、体系的かつ有機的に相互間が解釈できていれば間違いなく満点に近い得点が得られるでしょう。

基礎の確認

会計学は、特に得点源にしている受験生は多いが、入門者（実務経験や経理の経験すらない）にとっては、周囲の方々が「会計学は簡単だ！」と騒いでいても、勉強を後回しにしないで、基礎部分・土台をしっかりと構築していただきたく思います。

（業界自体が銀行関係者出身者が多いので、実務で叩き上げられた方々は確かに強いのは間違いありません。）

企業会計原則および注解の丸暗記は「基本」などと言われておりますが、内容が判らなければ時間とお金だけが無駄になるし、試験委員は「君、本当に判ってる??」というつもりで、本試験を聞いてくることを覚悟してください。

1) まず、企業会計原則の内容とその解釈を把握する。

（それらがすべて「損益計算書の適正化」という課題を達成するために適合している。）

2) なぜ、そのような会計原則および手続きがあるのかを考察する。

3) さらに、それぞれの原則および手続きがどのような位置づけで、どのように有機的につながりを持っているのかを把握する。

最後に、企業会計の目的や課題にしたがって、1本の樹形図を作ってみる。

（第2損益計算書原則から、つながりを持った1つのフローチャートを作れば、基礎論点は完成で、とりあえず、合格点の30点がもらえます。（もちろん、的確な日本語能力も必要です。）

多浪されている方へ

多浪されている方は、たぶん、自分の実力が試験委員に伝わっていません。

「知識」の整理をしてください。時間と論文用紙の文字数という制限の中では、無駄な書き込みや知識量の豊富さを強調させてしまう欠点がみられます。

体系的にまとめた論文の方が高く評価されます。

余計な部分を省き、コンパクトな文章で、それぞれに明確な結論部分があり全体を通じてまとまっている論文。そこにすべてがあります。

アウトプットの練習を最後までしていきましょう。